

弊紙第20号より

新型コロナ禍における葬儀の意義と これからの宗門僧侶に思う

駒澤大学名誉教授
佐々木宏幹

仏教 企画 通信

発行日 | 令和3年6月1日

64号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117
発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

新型コロナウイルス禍が終息の兆しを見せない中、寺院の活動も停滞を余儀なくされていることと思います。またこのような時勢にあつて寺院を取り巻く「葬儀事情」も大きな変化を見せていると聞きます。

いまから一一年前(平成二十二年)、弊紙では「曹洞宗の明日を考えるー葬儀は必要か」と題し、現在もご連載頂いている佐々木宏幹先生にもご登場頂いた記事を掲載しました。今読み返しても佐々木先生のご高見は非常に示唆に富んでおり、今一度私たち僧侶の心構えを問うている内容と考えます。今回、当時の佐々木先生のご発言をまとめた形で紹介をさせていただきます。(以下は『仏教企画通信』第二〇号内の記事をまとめた内容となっております。)

変化の潮流の中で 宗教家の 立ち位置とは

今、僧侶による葬儀を営まざり火葬場に遺体を送る直葬が拡がりを見せています。従来、戒名授与を含む葬祭儀礼は曹洞宗のみならず日本仏教が拠って立つベースとな

り最大の収入源となってきました。しかし、近年になって、そうした伝統に改めて意味を問う人々も増えていきます。宗教学者の島田裕巳さんは、今後は従来のようなしきたりはますます壊れていく、地域共同体が解体の過程にあり、家という集団性の強いものが個人化してばらばらになってきている、それに伴って儀礼のほうも変わらざるを得ないということを社会的下敷きで論じています。

一方、葬儀というものは地域文化的なものに支えられているという見方もあります。そこは深いところに棹をさせばさすほど、簡単には変わりにくいのです。既成仏教はその変わりにくい部分をよりどころにしながら今までやってきました。それが今、社会科学者や宗教学者が言うように変わりつつあります。それに対処して、宗教者はどう立ち位置を保っていけばいいのでしょうか。

なぜ葬式をしなくてはいけなのか

近ごろではなぜ葬式をしなくてはいけなのかという根源的な質問をする世代も出てきています。

わたしが小さいころは、そんな質問をしたら変わり者だと思われました。子どもが生まれたら誕生の祝いがあつて、やがて成人式とか結婚式とかがあつて、亡くなる時はまた盛大な葬儀で送るといふのが人としての道であるといふ

ことを誰も疑いませんでした。経済的に犠牲を払っても、こうした儀式を精一杯勤めることが社会人としての誇りであり、自分のアイデンティティにとつて大事なことだといふのは人々の常識になっていった。

それが都市化とか世俗化などの影響によって、そういう価値観が壊れてきました。そこからなぜ葬式をしなくてはいけなのかといった質問も出てくるのです。成人式などもまったく宗教性が抜きになつて、地域社会の首長が来て挨拶をし、紅白の餅や記念品などをもらつて、そこで袴をはいた連中が大暴れして終わりという具合で、もう意味がなくなつていきます。結婚式もお金をかけないのが当たり前になつてきて、わたしが先日出たところでも、宗教性も何もありません。仲人も立てませんし、誰か友人が、こういうことで二人は一緒にになりましたと挨拶すると、新郎新婦はチョコレートとか何かをやり取りして、リングを交換してそれで終わり。神に対してあるいは仏さまに対して、一生涯きずなが壊れないようにお誓いを立てるといふふうな意識が、だんだん弱くなつていくのです。

昔は生老病死の「生」は大変なこと、産婆さんが手を尽くしても、半分ぐらいは母子とも危険にさらされたのが、今はほとんど大丈夫になつてきました。そうなりますと生まれるということに対する祈願やお祈りの意味も薄れてき

ます。つまり宗教文化というもののでくくられるものの出番が、だんだんと少なくなつてきたことは事実だと思ふのです。

しかし、日本人にとつて葬儀というのは非常に大事な意味を持つていふのです。一神教のような絶対の神を持たない日本において、殺すな、盗むな、嘘をつくなといった道徳心のベースを形成してきたのは何かと申しますと、「そんなことをしたら先祖さまが悲しむよ」とか、「亡くなつたおじいちゃんおばあちゃんがかくよ」といった心情ではなかつたでしょうか。「おまえは嘘をついてうまくやつたと思つていふかも知れないが、先祖さまの向こうからのまなざしが、いつでも仏壇とかお墓を通して注がれているのだよ」といふような意識があつたのです。

ところが、今はそうしたことを説く機会が、教育からも地域共同体からも消えてしまつてつりまします。そこでお坊さんは声を大にして葬儀の意味を説かなくてはならないのです。

坐禅と葬儀は 一つながりのもの

都市部の人口の増えているようなところにおいて、お坊さんが修行もしないで葬式を専門にしていれば、それで布施がどんどん入つてくるという状況は、それ自体が本末転倒だと思ふのです。歴史的な話をすれば、そも

かばせるといいますか、成仏させるのにあつて力があつたという感じ方、考え方があつたのです。それを人々や社会が受け入れたから、葬式仏教と言われながらも、今のような状況が出てきたわけですから、これは最後は、僧侶の自覚の問題に収斂されるのだからと思ひます。ところがそうした状況のなかで、また別の思潮が出てきています。それは、もう葬式仏教の時代は終わりつつある、これからは、本来のところ、帰つて教義を一生懸命勉強するとか、あるいはかつては托鉢だけでやつていたのだから何かさういつたお坊さんらしい生活をするほうがいいというふうな主張です。そこでは葬儀というものは暗いものであり民俗的なものだから、それはそちらのほうに



そもそもどうして曹洞宗のお坊さんに葬式を頼むようになったかといふと、坐禅をし修行をしていふ人の法力、禅定力といったものが亡き人を浮

置いておいて、われわれは知識人の宗教者として、宗教文化を活性化することに当たってもっと教義を振りかざしていくべきだというようなことを言います。そして実際、布教師さんや中央から派遣された学者さんたちがそういうようなことを説くようになっていくのです。

それは文化人類学者の上田紀行さんの、『がんばれ仏教』という本の影響もあって、非常に合理化した現代的なお坊さん像を追求しようという傾向です。上田さんはそれを「仏教ルネッサンス」とも言っている。

ところで鳥田裕巳さんが著書で葬式は要らないと述べているのは、日本人は葬式に世界一金をかけている、お布施が高い、戒名料が高い、そうした庶民の心情をおもんばかったところから発言しているのだと思いますが、そこではなぜ葬式をしなければならぬのかという論点がやや欠けているような気がします。

死後にも 人格は残るのか？

人間は死んでしまったらただの骸(むくろ)に過ぎないという世界観をみんなが持つようになったら、葬式は意味がなくなりますが、われわれ仏教者は、死んだ後にも死者は生前と同じような人格の所有者として存続するのだという大前提があるから戒を授けるし、釈尊のところへ送ってそこで修行して頂きたいという願い

を持つわけです。その辺のところをもう少し聞きたいのですが、死者は死後にも人格を持ち、喜怒哀楽の情を持っている、だからねんごろに供養すれば死者の人格は仏の御子として喜んでくださるし、修行も続けていけるのだというふうな、そういうイメージというか、感性というか、あるいは硬い言葉では思想ですが、今そうした死後の存在に対する思想や観念自体が社会から薄くなりかけているのではないのでしょうか。お坊さん自体も社会のそうした風潮というか、流れに影響されて、葬儀に自信を失い迷っているように感じています。

遺族の安心を 忘れている

これは保坂正康さんというノンフィクション作家が息子さんを亡くしたときのお話なんですけれども、浄土真宗か浄土宗か分かりませんが、お寺に行くと、息子はどこへ行ったんでしょ。そうするとお坊さんは、「無量寿経にはこういふふうな説かれています」と、「阿弥陀経にはこうあります」とただお経を紹介するだけで、お坊さん自身のお浄土に、間違いないお浄土に行っているから安心しなさいとは言っていない。それでは結局どういふふうな自分で納得されたかという点、息子は二十歳で亡くなったけれども、自分と女房の心の中には永遠に生きて

いる。その気持ちや尊重しながら、遺骨の埋められてお墓にも定期的に行って拝む。それから心の中にお墓だけではなくて、遠くお浄土、仏界・仏国土というところにも息子がいる。そう二重に了解して、今わたしは生きています」と述べておられます。

何が若い僧侶に 影響したのか？

この文章にわたしは非常に感銘を受けました。浄土教の影響があつて日本に葬式が根付いたという説もありますが、西方極楽浄土への憧憬が日本人の心情にはあるということがよく理解できます。そして、お浄土にもお墓にも仏壇にも亡き人はいるという、こういう重層的な「あの世観」の中で、日本人は霊とか魂とかあるいはそれを総括した「ほとけさま」という対象をとらえているのではないかと思うのです。

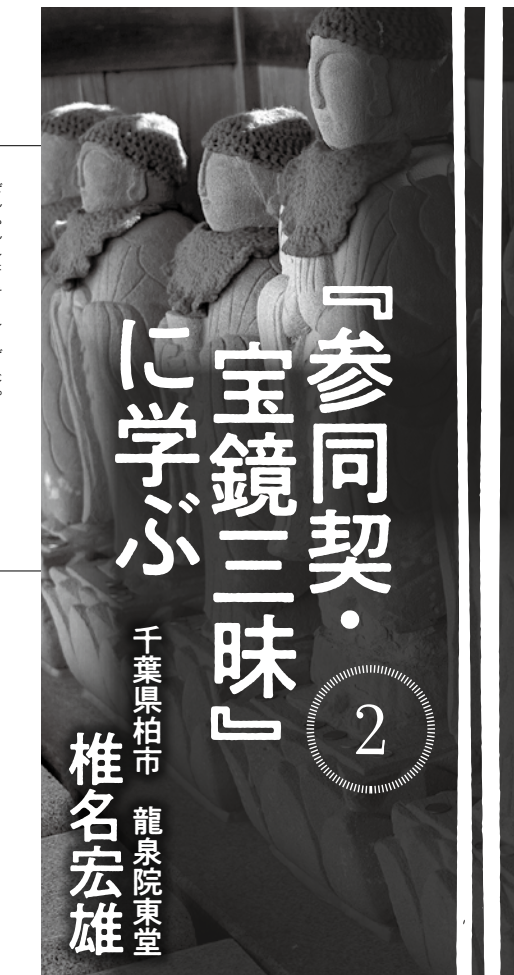
エリートたちの見解では、日本は葬式祈祷の仏教になつてしまっているけれども、本来の仏教はそうではなかったというわけです。そのときに、積尊をいきなり出す人と各宗派の宗祖、開祖を出す人がありますが、いずれにしてもそこから見ると、現在の宗門はまちがったことをやっているという自己否定が出てくる。それからもう一つ、社会的背景の変化ということですが、これは明治、大正、昭和、平成と比べてみれば、脱宗教というか、「脱あの世」とでも言うか、あるいは世俗化と言っていることは明白です。それに対して、仏教界は研究者も現場も含めて、どう対応するかということが遅れに遅れてしまつた。それなのにいま



『参・宝』の古注文献
三、ついで
— 卍山天桂の書 —

前述のように、『参・宝』の注記書は中国では稀少であり、日本には非常に多く存在している。この事実は、中国禅門ではこの両書を研究・考察した学者が少なく、日本では多かつたことを示している。多いといっても、日本の場合は曹洞宗の祖師が大半であり、それは『参・宝』の両書が青原下の祖師による撰述であることによるのは、

物に会つてそれを己れと為す者は、其れ唯だ聖人のみ乎」という語に感銘して『参同契』を成したところ、それは周易魏相陽による同名の書とは異なること、また永覚元賢の『洞上古軌』の所説とも大差があること、などを述べる。ところが、これについて、『参同契』を解釈するには宋代瑯琊慧覺が四分科をなしているから、『諸祖偈頌』にあるその科分による、として大科段を四分しているが、これは問題である。なぜならば、



『参同契・宝鏡三昧』に学ぶ 千葉真栢市 龍泉院東堂 椎名宏雄

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。



卍山禪師自贊頂相 大阪府高槻市伊勢寺所蔵 (筆者撮影)

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

『参・宝』の古注文献
五、は洞門中興の祖とされるが、『卍山広録』四九巻ほか多くの著述も遺した大学者。当面の『参・宝』関係では『参同契宝鏡三昧書神稿』(統曹全注解)一巻がある。本書は卍山の説示を、弟子の萬癡(覺)要門が編録したもの。

日本人に信仰の有無を尋ねると「無宗教です」と応える人が少なくないと言われます。一方、菩提寺があり、家には仏壇が安置され、墓参りをし、法事を行い、初詣は神社へ行き、キリスト教会で結婚式を挙げるなどからして、日本人は決して無宗教ではないとの指摘もあります。一神教を信じている人たちと違い、排他性がなく他宗教に対して寛容であることが日本人の宗教信仰だと説明することも少なくありません。この程度の議論なら、いささか宗教に関心を寄せる人、まして教えを説く側に立つ人なら常識的にふまえていることは疑いありません。加えて佐々木宏幹氏(「ほとけ」と力)や「仏力」が首唱された「仏(仏教学が主として扱うそれ)」と「ホトケ(民俗学が主として扱うそれ)」を結び「ほとけ(先の二つを複合化したそれ)」という理論も、日本人の宗教観・仏教観を知る上で大いに有効であると思います。「お盆」の行事も「仏」と「ホトケ」の双方にわたるからです。お盆は、「孟蘭盆経」によって「教団・仏」の側から意



群馬県良珊寺住職 駒澤大学総長 永井政之

「お盆」の時期におもうこと

しかしこのような日本人の宗教観・仏教観も、明治以降の自然科学や人文科学の発展、特に第二次大戦以後の急速とも言える復興の過程で変化してきたことは否定できません。特に都市への一極集中と地方の過疎化、そして少子化に伴って表されるような社会問題は誰

もが口にし、それが仏教教団にも大きな影響を与えていることは周知のところ。残念ながら、それらの問題を一挙に解決する妙案・特効薬は当面なさそう。私たちが「宗教を取り巻く状況に、変化がある以上、安閑としていることは許されない」と強く感じつつも、実際は手を拱いでいると言ったら言い過ぎでしょうか。原始経典の「黑白二鼠」の話を思い出してしまします。

孟蘭盆会の成り立ち―教理と現実の間―

仏教に関わる辞典を代表する一つに望月信亨氏による『仏教大辞典』があります。第二次大戦の前後にかけて書かれた、当時の仏教学の最先端に位置する成果で、この中では「お盆」つまり「孟蘭盆」に関する解説が、複数の視点から記されています。これらを読むと、お盆の成り立ちや歴史的な位置付け、さらに一般社会でお盆というものがどのように受け止められたのかもあらまし知ることができそうです。私個人は中国禅の研究を専門にしてきましたが、「お盆」が過去の出来事に止まってい

ない現実を見たとき、その背景に何があるかを考えることは、現代における「宗教」、就中「仏教」の役割を考える上での一助になることは疑いないように思います。まずは歴史的な流れから、お盆という行事の成立について考えましょう。

西暦一世紀頃、中国に仏教が渡来しました。シルクロードを通り、ブツダが亡くなってほぼ五〇〇年の時間をかけて中国へ伝わったことになりました。当初は「夷狄の教え」と見なされた仏教でしたが、中国固有の儒教や道教の教えと、時には反発し、時には複雑に融合し変容しつつ、次第に中国の人々の間に定着していきました。

仏教の教えを総括したとき、それは善因果果、悪因果と「因果を説くと教え」といえるのは先達が指摘するところ。南宋に生きた朱子は「誰も彼もが仏教の因果の教えに絡め取られている」と当時の社会の状況を憂いました。若いとき臨済禅を学び、のち儒教に転じてその復興に尽力した朱子の捉えた「因果」の教えが、本来的に仏教が説く因果と様相を異にしていることは想像に難くありません。それは先にも述べた事とも関わる、民衆が理解した仏教がどのようなものであったかということにもつながり、それだけに歴史の中でさまざまな問題を惹起してしまっ

た「2人称の死」に出会ったとき、「人はもともと空なる存在だよ」と割り切りことができるといいます。私たちがだれもが感情豊かな心を持つています。大切な人を亡くしたとなれば、その御霊に話しかけるように自然と手を合わせたとしても不思議はありません。理想と現実の狭間を行ったり来たりしながら暮らして

るが、筆者は洞山さんを五位の創始者とみることに異論があるのだ(前著『洞山』、二〇一〇年、臨川書店、p.188)。九六を参照)が、それはそれとして、わが宗学者たちはみな永覚の説に大きな影響を受けていることを知るべきであろう。

末になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!

「揺らぎ」のあることこそ人間的と言えるのではないだろうか。唐に生きた玄沙師備は師匠雪峰義存のもとで修行していましたがラチが明かざり、雪峰のもとを去ろうと山を下りました。ところが道の途中で躓いて足から出血してしまいました。玄沙は「空と云うが、この痛みはどうか」と思い、そこでハタと気づくところがあり、雪峰のもとへ帰り法を嗣いだと言います。「空」だけでは済まない私たちです。『箭輪経』などによっても知られるように、自分の経験に基づいて説法されたというブツダは、あの世があるともないとも断言せず、答えを保留されたと言われます。それはやはり「生きて今」を問題にするよう示された結果とされます。

中村元訳「ブツダ最後の旅―大バニツパンナ経―」で、ブツダは自らの死後、出家者は葬儀に関わるなど遺言され、結局、葬儀はマツラ族の人たちが取り仕切ったとされます。このことはとてもよく知られているエピソードですが、一方でマハーカッサパが到着して遺体の周りを右遷三匝したところ火葬の薪に火がついたなどあって、出家者と葬儀の関係が全く断絶していたわけではなかったことを想像させます。さらに『増一阿含経』大愛道般涅槃経」はブツダが養母大愛道の棺一脚を担いだこと、『浄飯王般涅槃経』では香炉を持って葬列の前を歩いたことな

ただ、この大学僧の著作類はきわめて機鋒峻烈、批判旺盛であるため、他から誹謗され異端視され、いわゆる「天桂地獄」の汚名すら受けている。しかし、筆者の見るところでは、天桂さんは単なるキレイ事や形式を嫌い、仏教や宗学の核心、正法の中核を常に志向していた真摯な宗匠であって、今日としては改めてその論説を再考すべきではないかと思う。

また当面の中国撰述者にふれている『参同契毒鼓』をみよう。その巻頭で天桂さんは、(一)法眼の注釈は世間に流布せず、上堂の語句を全部調べても見当らない。(二)瑯琊の科段は教家の判釈のようで、宗乗の眼目を欠く。(三)永覚の『洞上古轍』にみえる注釈は、妍醜が入り雑ついで、總当でない。(四)ただし雪竇重頤の『瀑泉集』中のものだけは「句を逐う著語が最も適切なり、故に老僧は彼に拠って此れを解して参徒に示す」(原・漢文)と述べ、自説のよりどころを明瞭に示している。

それでは、洞山さんのふれなかつた『瀑泉集』とは、いつたいどのような文献であろうか。『瀑泉集』一巻は、雲門宗中興の祖として知られる雪竇重頤(九八〇―一〇五二)が、己れの間答・垂示(説法)・提唱などの語句一五〇余則を集録したもので、雪竇の語録『明覚禪師語録』巻四に収められている。なお、この雪竇には『語録』とは別に『洞上古轍』があり、これが圓悟克勤によって垂示・著語・評唱が付けられて『碧巖録』百則となることは、改めていうまでもない。だが、その雪竇に『瀑泉集』なる作品があり、その中に『参同契』の註解が含まれているなどを知る者は、今日の禅門でも暁天の星。だから天桂さんがそれを熟知していたのは、実に驚くべきこと。筆者も右の「毒鼓」で初めてそれを知ったらしい。

その『瀑泉集』の註なる作品は、巻末に「石頭大師参同契」のタイトルで置かれてあり、まず雪竇の前言があり、昔の禅者たちの詩作の能力や付費の力量がすぐれていると述べ、『参同契』の一句ごと



天桂禅師自贊頂相 大阪府池田市陽松庵所蔵(筆者撮影)

述べ、『参同契』の一句ごとく雪竇が付した短註(著語)が置かれる。たとえば、「竺土大德心誰是能拳」「門門一切境捨短從長」「当暗中有明一見三」などのように。著語の数量は三文字から六文字までの短文コメント。天桂が諸注の中で最も適切と評し、これを拠り所として参徒に示すと明言するだけの名注である。

だいたい、天桂さんは『碧巖録』を殊更に重視し、『積韻鈔』十巻、『随聞記』三巻などの注釈書もあり、その一代記たる『天桂和尚年譜』(曹全史伝)によれば、生涯にわたる諸方で『碧巖録』を講義・提唱しているほどである。われわれは、改めて同じ雪竇が原著を撰述した『瀑泉集』中のものに注目すべきであろう。注目といえは、天桂さんのみならず前述の洞山さんも関心しなければならぬ。本書上下二巻は、明末清初の永覚元賢(一五七八―一六五七)によって編集された好著『曹洞宗全書』に収められているながら

（註解五）、なぜか宗門では知る人が少ないようで、あまり口にする人を知らないのは残念。中国の著述であるためか。しかし、内容はいやくも中国曹洞宗の基本文献を網羅した編集書であるからには、とても無関心ではすまされまい。わが近世には木版本が何度も刷られ、かなり流布したことが分かるから、つまり前掲の書をあまり読まないようである。前述の『碧巖録』は別格としても、『無門関』『臨濟録』『六祖壇経』など、文庫本をはじめずぐ手に入る名著類を座右に常置し、いつでも親しめるようにしておくべきだが、宗門人はとかく道元宗、瑩山宗を勝手に決めこんで、他を回顧しないとすれば、世間一般からおくられるばかりです。われわれ宗教の専門家は、まず基本図書を常置し、いつでも親しめるようにしておくのが努めでありませぬ。

内容には、巻上に『参・宝』の各註を置き、以下、「洞山五位」「五位図説」「投子青頌」「天童覚頌」「曹山三堕」「自得暉五転位」などの五位関係の文献三十数種、巻下には「先徳微言」と題して、葉山・道吾・雲巖・船子・万松など四十数名におよぶ洞門宗匠の言行・機縁を集めている。まさに中国洞上祖師の文献作品を集大成したものだ。これが力量高い永覚が長年月と労苦による編集であるからには、わが洞門の祖師が競って依用したのは必然であった。

ちなみに、永覚の系譜とはいえば、わが道元禅師の師・天童如淨の流れではなく、遠く北方の万松行秀を承ける法系に属する。万松さんは『従容録』の撰者として親しみは深い。法系的には芙蓉―鹿門―青州と連なる芙蓉下第七世の祖師。そして、万松さんは金代に耶律楚材の帰依により国都の燕京(現在の北京)を中心に活躍し、その門末は元・明代に北方を中心として大発展を遂げる。明

未になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!

永覚は『古轍』の後序のをはじめで、「新豊が創めて五位を立て、正中妙挾の旨を明らかに」と、洞山良价を五位の宗旨の開祖と位置づけている。実は、筆者は洞山さんを五位の創始者とみることに異論があるのだ(前著『洞山』、二〇一〇年、臨川書店、p.188)。九六を参照)が、それはそれとして、わが宗学者たちはみな永覚の説に大きな影響を受けていることを知るべきであろう。

末になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!



末になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!

末になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!

末になると南方に進出し、万松から第十三世の永覚が福州で活躍するのである。こうした元・明代に北方を中心に隠然たる勢力を保持してきた「北地曹洞宗」ともいふべき一派の動向については、中・日ともにまだまだあまり研究されていない。卑見によれば、各祖師の碑銘・塔銘などの金石原資料は、かなり多く現存しているし、また著者も若干は紹介しているが、著作類も僅かながら知られているのだ。ゆえに、こうした方面を鋭意解明や研究する学究者の出現、明学では待ち望んでいる若き学徒よ、ぜひとも出で来られ!



見えている事実として分かりやすいからだと思えます。仏教が問われるのは、具体的に僧侶が問われているのだと気づきます。

先達は、猛暑の時期に衣を着て、「暑い暑い」と言いながら、棚経に動きました。その姿に檀信徒の皆さんからお声がけいただき、中には「住職も大変だね」といってお茶を出してくださいる方もいたはずで、そうして培われ今にいたる信頼関係がありました。たとえ短時間ではあっても、交わされる会話の中には、家庭のことがあり、お寺のことがあり、時には「教えそのもの」にまで及ぶ。それが住職と檀信徒の間の「面授」と言うことになるでしょう、また教えを説く説法は、身口意の三業でなされる説法ですが、特に汗をかきつつの棚経は、「身業説法」として大切なことではないでしょうか。私たちが懸命に棚経に励む姿を見ていただくことで、心と心のつながりを大事にす

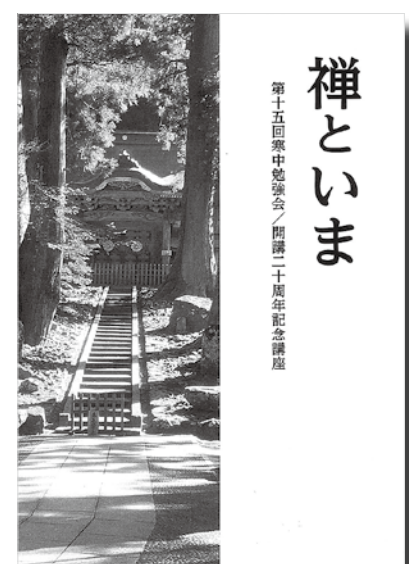
「靈魂」の永続性が、当然のように認識されていたとされます。人は亡くなった後も生前と同じ生活が続くと考えられました。秦の始皇帝に關わる西安の兵馬俑の存在は始皇帝の死後観を知らしめますし、湖南省の漢墓の発掘報告が、副葬品のなかに、食器や衣類、書籍といった生活用品がたくさんあることを記しているのは、その証左と言えましょう。

しかし考えてみれば、いつの時代でも、生前、権力の座にあって、豊かな暮らしをしている人ばかりではありません。むしろ貧困にあえぐ人たちの方が圧倒的に多かったはずで、そんな人々にとつて、死んだ後も苦しい生活が続くのは耐え難いことです。「因果」を説く仏教が、中国人社会で次第に支持されるようになったのは、この辺にも理由があるかもしれません。

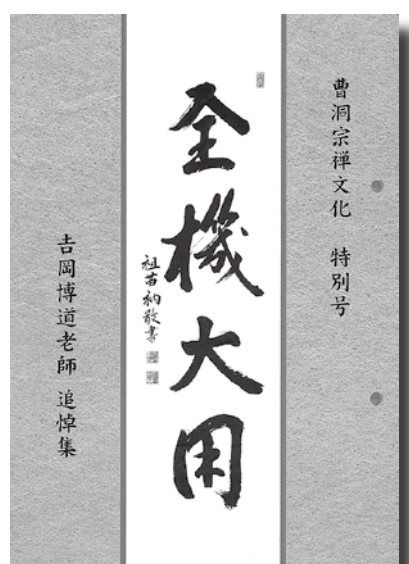
先にも述べたように、因果とは何事にも原因と結果があり、善因楽果、悪因苦果、自業自得を原則とします。良い結果を導くためには宗教的、道徳的、倫理的に良い行いを続けること、それが良い結果につながる。また悪いことを続ければ「苦」の結果となる。自分が作った原因の、その結果はいつか必ず自分が引き受ける。それが因果の道理です。ただしこのような因果の教えが、常に正しく理解されたかという点必ずしもそうではありませんでした。現実のさまざまな「有りよう」を因果論で説明してきたという「悪し

編集部にお送りいただいた書籍を紹介します。

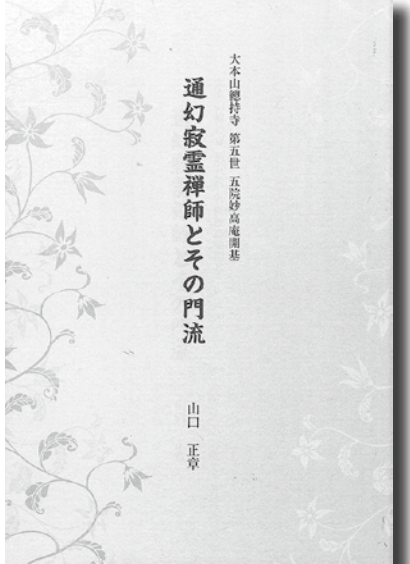
お問い合わせは発行元に直接お願いします。



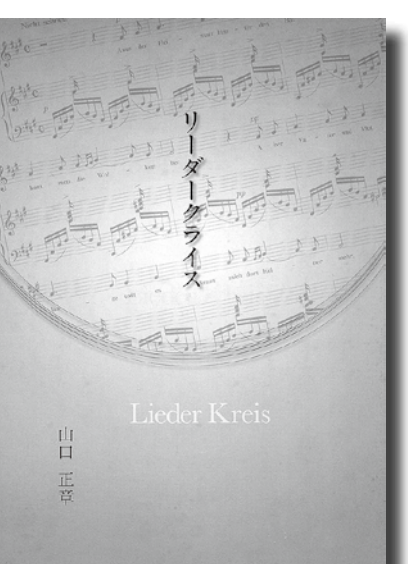
『禅といま 講義録』
発行：「禅と今」推進委員会(事務局：東京都新宿区原町2-62 大龍寺内)



『全機大用 吉岡博道老師追悼集』
発行：曹洞宗 禅文化の会(事務局：東京都豊島区南長崎5-21-8 全昌院内)



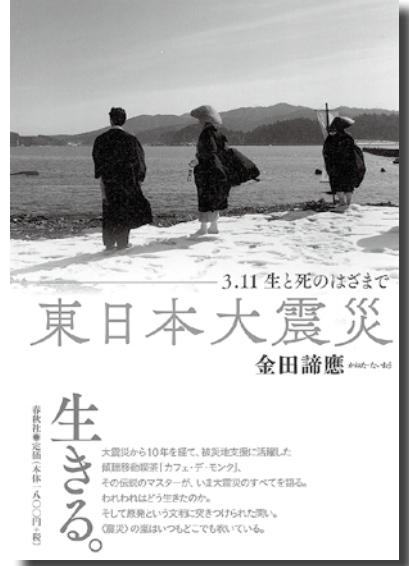
『通幻寂靈禪師とその門流』
著者：山口正章 発行：龍泉寺(福井県越前市深草1-10-3)



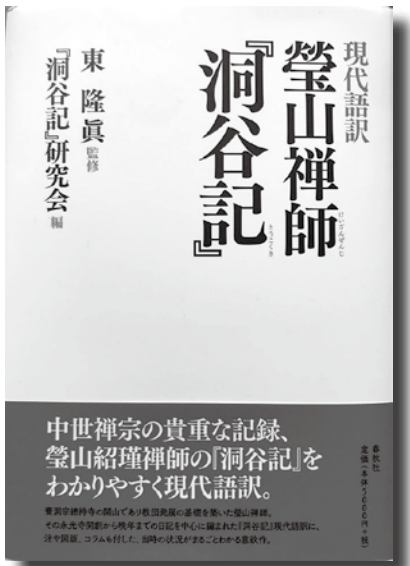
『リーダークライス』
著者：山口正章 発行：龍泉寺(福井県越前市深草1-10-3)



『可睡斎物語』
(定価：1818円+税) 編集・執筆：可睡斎物語編集委員会 発行：秋葉總本殿可睡斎(Tel.0538-42-2121)



『東日本大震災』
(定価：1800円+税) 著者：金田諦應 発行：春秋社(直接書店にておもとめください)



『現代語訳 瑩山禪師『洞谷記』』
(定価5000円+税) 監修：東隆眞 発行：春秋社(直接書店にておもとめください)



どを伝えています。私はこれらの記事が歴史的事実を伝えるかどうかが判断を保留しますが、少なくとも後の仏教教団が、素朴ながらも次第に葬送儀礼を行うようになる中で創られていった可能性を否定できないと思っています。

のち中国に渡来した仏教の葬送儀礼は、儒教の孝思想、それに伴う葬送儀礼と、時に反発、時に融合して成立展開していったことが知られます。

ともあれ私たちが現実に営まれている死者供養の順を踏まえてか、まず葬儀が営まれるその後で追善供養が行われるようになったと考えがちです。儀礼が行われる順としてはその通りなのですが、法要の成立を歴史的に見るとどうでしょう。葬儀にしても追善にしても、中国の場合、儒教や道教との関係は無視できませんし、それらはほとんど同時に並行して行われたとも考えられますが、あえて関心の強弱について見ようとするなら、「追善」がまず意識され、それが展開し整備されて「施食会・水陸会」や「お盆」となり、一方で儒教の儀礼を承けつつ葬送儀礼が意識され整備されていったのではないかと、私は考えています。南北朝の時代、「自分の葬儀は簡単に」と遺言する文人がいる一方、水陸会などが営まれるようになってきたことは示唆的です。つまり中国人にとつては、死ぬことも生きることも、そのあとの「死後の世界」の方がとても気になったのではないのでしょうか。

そもそも古代の中国では、「靈魂」の永続性が、当然のように認識されていたとされます。人は亡くなった後も生前と同じ生活が続くと考えられました。秦の始皇帝に關わる西安の兵馬俑の存在は始皇帝の死後観を知らしめますし、湖南省の漢墓の発掘報告が、副葬品のなかに、食器や衣類、書籍といった生活用品がたくさんあることを記しているのは、その証左と言えましょう。

しかし考えてみれば、いつの時代でも、生前、権力の座にあって、豊かな暮らしをしている人ばかりではありません。むしろ貧困にあえぐ人たちの方が圧倒的に多かったはずで、そんな人々にとつて、死んだ後も苦しい生活が続くのは耐え難いことです。「因果」を説く仏教が、中国人社会で次第に支持されるようになったのは、この辺にも理由があるかもしれません。

先にも述べたように、因果とは何事にも原因と結果があり、善因楽果、悪因苦果、自業自得を原則とします。良い結果を導くためには宗教的、道徳的、倫理的に良い行いを続けること、それが良い結果につながる。また悪いことを続ければ「苦」の結果となる。自分が作った原因の、その結果はいつか必ず自分が引き受ける。それが因果の道理です。ただしこのような因果の教えが、常に正しく理解されたかという点必ずしもそうではありませんでした。現実のさまざまな「有りよう」を因果論で説明してきたという「悪し

き業論」についてはすでに指摘されています。

また私の力では十分にお話しできませんが、たとえば親しい人の死に遭遇したとき、さまざまな善行を行って功德を積み、その結果を死者供養に振り向けるという「回向」の考え方も、自業自得という因果の基本原則とは異なっているにも関わらず、「死者供養」が成立するうえでは重要な柱の一つであることに注意しなくてはなりません。

以上のような背景のもとで「盂蘭盆会」は行われるようになりました。「お盆」においては生者・死者が共に食事する「共食」の思想も見逃すことはできないのではないかなども含め、「曹洞禅グラフ」夏号でも言及したのでここで再論しませんが、『盂蘭盆経』によるとされる目連尊者の故事が、親孝行という儒教の世界、地獄を透視したという神通力・道教の世界、教団への供養や回向をはじめとする仏教の世界を総合したものであることはご存知の通りです。

激変する社会に生きる

一昨年からコロナ禍においては、オンライン利用のご葬儀や追善供養をしてきたお寺も多いため聞きなれます。コロナを避けるため、遠方からの列席が叶われない檀家さんの気持ちに配慮するように柔軟に対応することは非常に大切です。私にもそのような檀家さ

んのために読経をし、それを画像でお送りした経験があります。言うまでもありませんが、直接、寺へお越しください方のためにアルコール消毒や予備のマスクも用意し、座る場所についても「三密」を避ける配慮をしています。

このような現状が直ちに解消するとはとても思えません。昨年もそうでしたが、今までのようなお盆ができず、「新常态」のまっただ中にいる私たちは、さまざまな工夫する必要がありましょう。この場合、時代の変化に対応し、アンテナを張ることは重要でしょうが、かといってやみくもに先頭を切って改革を行う、すべてのご供養をオンラインで行いましょう、ということにはならないように思います。多くの人が使うSNSで仏教を広めることも大いに結構です。さまざまな選択肢を利用するための試行錯誤を否定できません。しかしどのような形で情報を発信するにせよ、その内容は「本物」を発信するという責任と、一過性に止まらない継続性が求められると思います。次世代にもつながらる活動なのか。ここでも私たちの行動が問われることになりそうです。

マスコミは、オンラインによる葬儀にはじまり、従来では思いもよらなかつたさまざまな試みのあることを報道します。時にはそのような試みが「主流・大勢」であるかのような論調も見られます。そんな報道を受ける私たちは、自分たちが乗り遅れているか



群馬県渋川市 如意山 良珊寺

の如き感じにとらわれてしまっています。しかしよくよく考えれば、マスコミが報道するのは「ニュース性」があるからで、必ずしもそれが「普遍性」を持つからではないことに気づきます。私自身は守旧派ではありませんが、やはり伝統は大切にすべきと思っ

オンラインが普通に語られる中で、逆に「対面」という言葉が今まで以上によく用いられるようになったことに気づいた方、少なくないと思います。

それは道元禪師の言葉で言えば、まさに「面授」が再認識されているということでしょう。

「面授」が、師からの教えを顔と顔を付き合わせて学び、叢林において限りある「一時」を、「同じ釜の飯を食いつつ」切磋琢磨して過ごすことで、人間と人間の関係を構築していくことを指すことは、いささかでも道元禪師、瑩山禪師そして曹洞宗について学ばれ

た方なら誰もが知るところでしょう。

ブツダの説かれた教えを、本などを通して興味を持つことは大事ですが、仏教、あるいは禅の立場からすれば、やはり実践することに意味があるはずで、ただしその実践を常に正しく行うには歩むべき方向を適切に示してくれる師匠・正師のいることが絶対の条件であるとされます。

「警咳に接する」という言葉を再考する必要があります。学問に限った事ではありませんが、私自身、いろいろな分野でお世話になった、いわゆる恩師と共に過ごしたという事実は、数十年を経て覚えています。その「出会い」のおかげで今の自分があるという想いには筆舌に尽くしがたいものがあります。

結局、効率を重視する社会だからこそ、効率だけでは済まない「出会い」や「人間」について考える必要があると思えますし、そこに「仏教」の出番があると思っ

「篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり」と説いたのは聖徳太子でした。三帰依が仏教信仰の基本となることは言うまでもありませんが、よくよく考えてみると、仏法僧のうち、「仏」や「法」の悪口を言う人ははまらずに、いたとしても少数のように思えます。しかし「僧」についてはどうでしょう。「僧」にいたっては、褒めるよりも文句を言われることの方が少なくないようです。それは目の前に

編集後記

藤木隆宣

コロナ禍が一年以上続き私たちのお寺はどう変わるのだろうか。収入の大半を葬儀、法事のお布施を当てているご寺院が多分大半だろう。私の寺も同じ境遇だ。

菩提寺を大事に思う考え方は都会地と田舎ではかなり温度差がある、田舎は長い年月をかけて寺檀関係が築かれているのでお寺を思う考えは都会地に比べると強い。今年九十六歳で亡くなった母親のことをお寺様のおかげで長生きできました。しかし人口形態が団塊の世代から次の世代に受け継がれて来てまさに戦後の教育を受けた世代が相手だ。また、田舎の人口減少と都会の人口増加はこれからは続くのではないだろうか。

2021秋・お彼岸特集予告
2021年8月20日 発刊予定
曹洞禅グラフ

- 一、瑩山禅師がご活躍された時代と活動背景
二、瑩山禅師の最大の御功績は
三、瑩山禅師からの教えで21世紀に活かせることとは



インタビュー | 柳澤 円

敷く仕事をこう呼ぶようだ)の仕事者一人親方としてされてきた。年は六十五歳でまだまだお元気そうなのでこれから十年は仕事が出来ますねと言ったらいよいよ年下の発注元は年上には気を遣うようです使ってくれないのですと云っておられた。その方の友人で福井県大野の宝慶寺で修行をしていた方がありその友人に誘われて宝慶寺に行ったことがあるとのことだった。その時の住職がなんと田中真海師だったようである。田中さんは私が昭和四十二年に永平寺に安居したときに確か客行和尚でしたからまともに目を合わせることできない存在だったことを申し上げればしほし永平寺の思い出話をした。この方は相模原市の日庭寺の近くのマンションにおられるので行事があればお手伝いをしていただくかと考えている。

翌日にはご自宅に帰って行かれた。三日後に預かっているカギを忘れたのでお返しに行くといわれたが郵便で充分ですと申し上げた。
神奈川県の田舎にお住まいの方にお寺にどんな思いを持っておられるか聞いてみた。葬式だけに来ような住職さんではだめだな。日ごろの関係が大事だと仰っていた。
今年の二月三日に辞令が出た下北沢の小庵永正寺での取り組み。私が立教院時代の恩師、哲学者内山節先生が講師で『私たちはどこに帰るべきなのか』『仏教を通して日本の民衆思想を読み取りながら』『第二回(五月一六日一六時)』修証義第一章を明らかに死を明らかにするは仏家一大事の因縁なりを参考にしながらがオンラインとリアルで展開している。第三回は六月は一日一六時から一八時まで。オンラインで少し覗いてみたい方は私のメールまでご連絡戴ければ詳しくお知らせします。

fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画発行の刊行物

- 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円★
『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円★
『葬送のしおり』 長井龍道著 30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円★
『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説 300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 靈元文法著 140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 靈元文法著 150円★
随想集 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著 500円

Table with 2 columns: 発行日 (Issue Date) and Price. Rows include 春彼岸号 (2月10日), 夏お盆号 (5月30日), 秋彼岸号 (8月20日), 冬正月号 (10月30日), and a section for 曹洞禅グラフ (Soto Zen Graph) with prices for 1部 (200円) and 9部以上 (200円 to 90円).

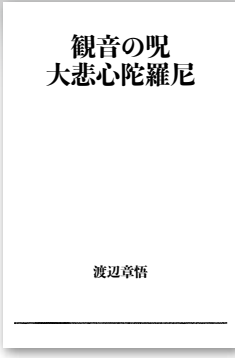
*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

手まり学園

寄附者御芳名 R3.1.27~R3.5.15

Table with 3 columns: 所在地 (Location), 寺院名(個人名) (Temple Name/Individual Name), 金額 (Amount). Lists donors from various prefectures like Aichi, Tokyo, and Kanagawa, with a total amount of 166,000.

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。



発行所：仏教企画 定価：本体 500円+税

観音の咒 大悲心陀羅尼 渡辺章悟著

お求めは下記お申込先までご連絡ください

お申込み 252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp